多文化をあきなう

タイの有機ジャスミン米

鶴田格（つるた ただす）
近畿大学准教授

歴史も浅くあまり知られていないが、フェアトレード食品のひとつにコメがある。社会運動の一環による有機農業から始まった、タイ東北部のジャスミン米のフェアトレードは、政情や産地間の競争など、さまざまな問題に直面している。

高級香り米

タイ米に代表されるインディカ米は、日本では「安くてまずいコメ」というイメージがつきまとう。じっさいに家庭で調理に使われることはほとんどないし、輸入されたタイ米の多くは泡盛やせんべいの材料として使われている。しかし、なかには国際市場において高値で取り引きされるタイ産の高級香り米もある。それが「ジャスミン米」である。タイは二〇一二年にインドとベトナムに抜かれるまで長年世界一のコメ輸出量をほこってきた。その輸出米の少なからぬ部分を、普通白米とくらべ二倍前後の高値で取り引きされるジャスミン米が占めているのである。

ジャスミン米の主要産地は、タイのなかでももっとも貧しい地域とされる東北部である。東北タイでは一九八〇年代からジャスミン米の生産が急拡大し、全国の生産量の八〇パーセント以上がそこで生産されるまでになった。東北タイの主要民族ラーオ人はもち米を主食とする。にもかかわらず東北タイの一部地域では、販売用のジャスミン米の生産量が地元で消費されるもち米の生産量を大きくうわまわるようになった。

はじまりは社会運動

コーヒー、紅茶、バナナなどにくらべ、コメのフェアトレードの歴史は比較的あたらしい。スイスのNGOが東北タイのスリン県からおそらく最初のフェアトレード米を輸入したのが一九九〇年代初頭、国際フェアトレード認証機構がコメの認証に関する基準の制定に動きはじめたのが二〇〇〇年のことである。それ以降フェアトレード認証米の取引は急速に拡大してきており、なかでも欧米むけのタイ産やインド産の高級な香り米が大半をしめ、有機栽培認証を同時に取得しているものも多い。

有機ジャスミン米の生産がさかんな東北部のスリン県では、コメのフェアトレードはもともと農村の貧困撲滅や生活改善をめざす社会運動から派生してきた。一九八〇年代のなかば、スリン県の農家は農産物価格の低迷、化学肥料や農薬の使用がもたらす土壌や生態系の劣化といった問題に直面していた。こうした問題を解決する有力な方策としてうかびあがってきたのが有機農業の推進だった。スリン市郊外の寺にいたある高名な「開発僧」の尽力により、一九九一年にはついにスイスのNGOが無農薬のコメを買いとってくれることになり、フェアトレードの理念にもとづくコメの輸出がはじまった。その後主要な農民組合は自前の精米所を建設するまでに成長し、有機米の生産と輸出は順調に伸びていった。

政治に翻弄されるコメ農家

ここ一〇年ほどのあいだスリン県や近隣諸県では有機ジャスミン米の生産・加工をおこなう農民グループがふえている。そうした競争の激化とともに有機米生産組合の幹部を悩ませているのは、政府のコメ担保融資制度である。これは生産されたコメと引き替えに市場価格よりも高い値段で農家に対して融資をするもので、政府による事実上のコメ買いあげ制度である。前政権のインラック首相は、支持基盤である農家の人気とりのため、高価格でのコメ買いとりを約束した。そのせいで、もともと付加価値のたかい有機米の生産者価格と、一般米の政府買いとり価格（そこでは有機・非有機の区別はない）がほとんど拮抗するまでになり、組合は必要な有機米を確保するためにさらなる買いとり価格の値あげにふみきらざるをえなかった。このことはただでさえ財政事情のきびしい農民組合を苦しめることになった。結局、このコメ担保融資制度が巨額の財政赤字をうみだし汚職の温床になったとしてインラック政権はきびしい非難にさらされ、二〇一四年五月におこったクーデターにより退陣を余儀なくされた。

輸出依存からの脱却

こうして有機ジャスミン米の生産とフェアトレードは、不安定な政治情勢に左右される一方で、きびしい産地間の競争にも直面している。ベトナムなど近隣諸国もちかく有機ジャスミン米の輸出に本格的に参入するであろうと予測されている。そのようななか、輸出ビジネスだけに依存しないあたらしい動きがあらわれている。ひとつは海外でなく国内の消費者にむけた有機米ビジネスの展開である。たとえば仏教の戒律に忠実な道徳的な生産者がつくる「道徳米」の販売という、仏教国ならではのブランド戦略をとる農民グループがあらわれた。もうひとつの重要な動きは都市部で毎週開催される有機農産物・加工品の直売市場（「緑の市場」）の隆盛である。有機米の生産・認証でつちかったノウハウをいかして、生鮮野菜や加工品などを農家が直接販売するしくみを農民組合のメンバーが中心となってつくりあげたのである。ちかい将来有機米生産グループ間の競争ははげしさを増し、輸出依存のフェアトレードはいっそう不安定な状況におちいるであろう。だから、こうして国内の有機農産物市場を開拓し生産者と地元消費者のあたらしい関係をきずいていくことは、個々の農家の経営戦略としても、地域の食料安全保障にとっても、とても大切なことである。

毎週土曜日に開催されるスリン市の緑の市場はすっかり市民に定着した

道徳米ブランドの赤ジャスミン米

国などの資金援助で巨大な精米施設を建設する組合もあらわれた

コメの選別をする農民組合職員

欧米むけに輸出されるジャスミン米のパッケージ